些細な社交上のミスが いかに最高のチャンスを台無しにするか

彼には、自分たちが見られていること、社交上の知識不足を恥じる自分たちの気持ちが見透かされていることが分かりました。

バイオレット・クレイトンは、夫のことを誇りに思っていました。それには理由がありました。6年前、彼は出世階段の最下段にいましたが、今ではほぼ最上段に近いところにいるからです。あとは決然と一歩を踏み出すだけで、垣根を越えて、富、権力、影響力のある世界へ、すぐにでも飛び込そうな気がしていました。

テッドが朗報を持ち帰ったとき、得意だったのも当然です。彼は「いやー、ヴィー、ついに来たよ!」と微笑みました。「クローザーズが退社して、僕が彼のポジションに就くことになった。僕が本当にあの会社の副社長の1人になるんだよ」

ヴァイオレットは心から驚き、そして喜びました。「重役婦人ね。いい響きじゃない?」と笑いながら、来たるべき輝かしい未来について2人で計画を立て、彼が達成しようとしている大きなプロジェクトや、彼女が家で催す素敵なパーティなどについて話し合いました。しかし、その素晴らしい計画の裏には、言葉にできないかすかな不安が隠されていることに2人とも気づいていました。一でも、2人ともそれを無視したのです。

招待を受ける

次の晩、テッドはさらに大きなニュースを持ち帰りました。ブランドン家で食事をすることになったのです。実際にウィリアム・ブランドン氏に招かれたのです!テッドがいかに喜んでいるか、まさにこのチャンスをどれほど夢見てきたことか、どれほど望んでいたかヴァイオレットには分かっていました。しかし彼が夕食の誘いについて話すと、彼女の心には突然何か引っかかるものが浮上しました。

もちろん、彼女は十分に幸せでしたし、テッドが目標を 達成したことを誇らしく思っていました。しかし、自分たちは招待される準備ができているだろうか一新たな社交の 世会に優雅に溶け込めるだろうか、教養は備わっているだろうか、うっかりミスで恥かしい思いをしたりしないだろうか? 彼女は心配でした。今回失敗すれば、ダメージはこれまで以上に大きなものとなりそうでした。そして、女の勘でテッドと自分には何かが欠けていると感じました。

「でも、テッド、私たち、本当に招待を受けるべきだったのかしら? ブランドン家がいかに凝ったもてなしをするか、そして彼らがいかに格式ばった人たちか、知ってるでしょう。私には、イブニングドレスを着るべきかどうかさえ分からないわ!」と彼女は問い正しました。

テッドは一瞬黙り込んだ後、ゆっくりと答えました。「断れるはずがないだろう。僕らはただ全力を尽くすしかないさ。ブランドンさんは最終的な手配を進める前に、僕とじっくり話がしたいんだ。でも、僕自身も内心不安なことは認めるよ。ところで、タキシードを着た方がいいかな。それとも燕尾服にすべきかな?」

真の成功には、仕事の出来不出来以上の何かが必要だということに、クレイトン夫妻は初めて気づきました。人柄、教養、社交上の魅力が重要な役割を果たすことに気づいたのです。自分たちには社交上の知識が不足しており、何が正しくて、何が間違っているのかということに関して無知だと強く感じたのでした。

テッドは、ブランドン家の豪邸の前で車を停めながら、「ひどい失敗をしませんように」とつぶやきました。一方、ヴァイオレットは、今宵は全力を尽くし、上品で洗練された素晴らしい振舞いをするのだと密かに誓うのでした一すべてテッドのために。

ひどい間違いを犯す

彼らがブランドン家に到着したのは、ロバーツ夫妻が到着する直前でした。テッドが何等かの理由で、空きのあるそのポジションに就けない場合は、代わりにロバーツ氏がそのポジションに就くという暗黙の了解があったのです。彼は非常に威厳のある紳士でしたし、その夫人には、瞬時に敬意と称賛を集める器量のようなものが備わっていました。ヴァイオレットは、自己紹介の際、「お目にかかれてうれしゅうございます」という機械的な挨拶をぼそぼそと返して、恥をかいてしまいました。そして、何か気の利いた挨拶を用意しておくべきだった、と後悔しました。

ヴァイオレットは、ブランドン氏とロバーツ氏の間に座



りました。彼女はのっけから針のむしろに座らされている 気分でした。彼女の向かい側に座ったテッドも、やはり落 ち着かず、肩身の狭い思いをしていました。場違いな感じ がして、困惑していました。ブランドン氏はすぐに、政治 への女性の影響について長い話を始め、その話に紛れて、 2回目まではそれなりに楽しむことができました。

しかし、その後、ある事が起きました。ヴァイオレットは、ロバーツ夫人がロバーツ氏の方をちらっと見て、ほんの少しだけ眉をひそめたのに気付きました。彼女は何がいけなかったのだろう、と思いました。ナイフでレタスを切ったのが良くなかったのかもしれない。テッドはあんなふうにフォークを使うべきではなかったのかもしれない。そして困惑するなか、彼女はナイフを落とし、執事と同時にそれを拾おうと身をかがめてしまいました。ああなてひどくみっともないことをしてしまったんだろう! 来るべきではなかった一と思いました。彼らは、何をすべきか、どのように振舞うべきかを知らなかったのです。

ブランドン氏が再び話し始めていました。テッドはすっかり聞き入っているように見えましたが、心の中は、腹立たしさで煮えくり返っていました。トレーニングを受けたこともないのに、洗練された紳士になることを期待されるなんて不公平だ。テーブルマナーで人を評価するなんて間違っている! それにしても、なんでヴァイオレットは、ナイフとフォークをあんなにぎこちなさそうに使うんだ?なんでロバーツ夫人のように優雅で魅力的に振舞えないんだ? 彼は恥ずかしくて、ひどくやりきれない気持ちでした。ミスを犯さないようにするよりも、ブランドン氏の話に集中できたら、どんなによかったでしょう。

痛烈な屈辱を味わうクレイトン夫妻

夫の向かい側に座っていたヴァイオレットは、静かに会話に耳を傾けていました。ロバーツ夫人がこっちを見ませんように、もうこれ以上ミスをしませんように、そして、この苦行が早く終わりますようにと願っていました。執事が、オリーブの載った皿を持って、彼女の側で止まりました…

「おい、クレイトン君、君は私の話を聞いているのか ね?」テッドはハッとしてホストの方に向き直りました。 彼は聞いていなかったのです。注意を払っていなかったの です。ちょうど反対側にいる妻が、みんなの前でオリーブ をフォークで取ろうとしていたため、それどころではあり ませんでした! 彼の方をちらっと見たヴァイオレットは、 夫のぎょっとした表情に気づきました。彼女は顔を真っ赤 にして、恥ずかしがりました。ブランドン氏は少し驚いた ようでしたし、ロバーツ夫人はもう少しで笑いそうでした が、一応その場は収まり、再び会話が始まりました。テッ ドにとってその晩は、取り返しがつかないほど台無しにな りました。ヴァイオレットと自分が社交上の知識不足を恥 じているのは、誰の目にも明らかでしたし、育ちが悪く、 教養がないと皆が見とがめていることを彼は知っていまし た。しかし、殿方の喫煙がまもなくというタイミングで、 婦人たちが応接室に下がろうとテーブルを離れた際、彼も それに付いて行こうと立ち上がってしまったのです。彼は そこで皆の奇異な視線を感じ、自分たちがひどい過ちを犯 し、すっかり面目を失ってしまったことに気づきました。

彼は、他の来客が帰路に付き、ヴァイオレットが外套を取りに別の部屋に行っている間に、ブランドン氏からこう言われても驚きませんでした。「悪いな。例のポジションの後任は、ロバーツ氏にするよ。どんなポジションの人間とも、独力で対応できる、社会的身分が確かな人物が必要なんだ。我が社の重役は、どこに行っても良い印象を持た

れるようでなければならない。人から直観的に信頼され、 尊敬されるような人物でなくてはならないんだ」と。

チャンスを失うも、新たなチャンスが見つかる

その晩、家に帰ったヴァイオレットは、慰めさえ受け入れようとはしませんでした。「全部私のせいよ。あなたの最高のチャンスを台無しにしてしまったわ」と言って泣きました。しかしテッドは、自分にも彼女と同じくらい責任があると感じていました。

彼は、「別のチャンスがまたすぐにやって来るよ。今度 こそ、準備万端さ。信頼できて権威のあるエチケットの本 をすぐに買ってくるから」と言いました。

ヴァイオレットは、有名な『エチケット読本』を手に入れて初めて、彼らの求めている社交上の知識、身のこなし、品格を身に付けるのがいかに簡単かを知り、ようやく元気を取り戻しました。彼らが恥ずかしい失態を演じることは、もう二度とないでしょう。もう決して屈辱を感じることもないでしょう。そこには、まさに彼らが求めていた情報が書かれていたのです。あらゆる状況、あらゆる場面で、何をし、何を言い、何を書き、何を身に付けるべきかを示す、明確で、はっきりとした興味深い情報が載っていました。

テッドとヴァイオレットは、毎晩一緒に『エチケット読本』に目を通しました。その本は、彼らがブランドン家で犯したすべての過ちを明らかにし、本当はどうすべきだったのかを教えてくれました。それはまさに開眼と言えました! 彼らがその素晴らしい本を読み終わる頃には、たとえ最も華々しい著名人たちと付き合いにあっても、どんなときも慌てることなく、ずっと安心していられるのだと分かりました。

エチケット読本があなたにとってどれだけ重要か

『エチケット読本』は、上流社会での振る舞いに関する 最も信頼できる最新の情報源の1つと評価されています。 この本は、物怖じするような状況で、いかに毅然と振舞う か、どんなときでもいかに落ち着いていられるか、常に完 壁で正しい振舞い方、話し方、書き方、装いを、多くの男 女に示してきました。どこの人々もこの本のお蔭で、魅力 的な社交術のコツを素早くマスターできるようになり、非 常に教養の高い人々とも、楽に親しく付き合うことが可能 となりました。『エチケット読本』は、現在ボリュームたっ ぷりの全2巻で発行されています。社交上重要な事柄に関 するすべての疑問に対して、興味深い価値ある情報が収録 されています。エチケットに関する全項目が完全に網羅さ れています。何一つとして省略されたり、なおざりにされ たりしている事柄はありません。あなたはあらゆる事柄を 学ぶことができます――海外でポーターに渡すチップの妥 当な額から、トウモロコシの正しい食べ方まで。古いしき たりが現在の慣習につながっている場合は常に、その由来 が説明されています――花嫁が白いベールをかぶる理由、 名刺が利用される理由、ダチョウの羽根飾りが法廷で身に 付けられる理由などです。あらゆる次元のエチケットにつ いて、最新の状況が記載されており、どんなに些細な点も、 どんなに細かい事柄も省略されていません。

5日間の無料お試し期間

『エチケット読本』をご自宅でお好きな時間にご覧になれるよう5日間無料でご覧いただけます。あなたには何の義務も発生しません。完全に無料です。クーポンに必要事項をご記入の上、当社にご郵送頂くだけです。すぐに『エチケット読本』全2巻をあなたのお手元にお届けいたします。どうぞ5日間無料でじっくりとご検討ください。

『エチケット読本』は全2巻で、金で装飾された布製の豪華な装丁となっております。各巻には、興味深い価値ある情報が含まれており、人々と交流される際、いつでも末永くご愛用いただけます。素晴らしいこのセットを無料でご検討いただけるこの機会をお見逃しなく。今すぐ、クーポンをご郵送ください。

5日間のご検討期間内に、『エチケット読本』を引き続きお手元に置かれるかどうかをお決めください。同セットを5日以内にご返送なさるか、わずか3.50ドルを全額お支払いになり、永久にご自分のものにされるかのどちらかを選択する権利が、あなたにはあります。しかし、だからと言って、あなたに何らかの義務が発生することはありません。『エチケット読本』が何らかの理由でお気に召さない場合は、どうぞご遠慮なくご返送ください。今日、クーポンを切り抜き、当社までご郵送ください。